奨学生レポート　　多田野奨学生　2023 年度第 2 号

前場圭子（徳島大学 1 年）

# 眉山

先日「医と法」という授業で献体について講義を受けました。献体とは、医学、歯学の大学における解剖学の教育・研究に役立たせるため、自分の遺体を無条件・無報酬で提供することをいい、「自分の死後、遺体を医学・歯学の教育と研究のために役立てたい」と志した人が、生前から献体したい大学またはこれに関連した団体に名前を登録しておき、亡くなられた時、遺族あるいは関係者がその遺志にしたがって遺体を大学に提供することによって、はじめて献体が実行されることです。その授業の中で「眉山」という映画を紹介されました。眉山とは、徳島大学医学部の真後ろにある眉の形をしたなだらかな山です。さだまさしの小説「眉山」が原作の映画です。献体を決意した末期がんの母とその娘が主人公で、母がなぜ献体を決意したのか、母が残した箱から、まだ会ったことのない父のこと、母の想いを知っていくストーリーです。徳島が舞台で、解剖実習前と後に年二回ある解剖慰霊祭のシーンは実際に慰霊祭の会場になる徳島大学医学部にある講堂が撮影に使われ、徳島大学医学部医学科の学生たちがエキストラで参加したそうです。そのことを聞き、冬休み期間に是非見てみたいと思いビデオを借りました。映画の中で、母は自分の病気が末期がんであることを知ったとき、大学病院に医学部生のためにと献体を申し出ます。そして死後、医学部生の解剖実習が終わり、二年後の解剖慰霊祭で母の遺骨が娘へと引き渡されます。娘は母の死の直前に、献体の行為が、母が愛した当時医学生だった男性を育てた医学への感謝としての行為であったと知ります。私はこの映画を見るまで、ご献体についてほとんど考えたことがありませんでした。私の大学では二年次から解剖実習が始まります。三か月間朝から夜までかかることもあるそうです。講義で受けた知識や手法を実際の人体で確認していきます。講義や教科書だけでは解剖学をきちんと理解することは不可能です。私は研究室活動で何度かマウスの解剖をしました。一匹一匹臓器はそれぞれ本にのっている様子とは異なり、亡くなる前にたくさん食物を摂取していたものの胃は大きかったり、食物を摂取していなかったものは胃とはわからないぐらい小さかったりと形が違うだけでなく、病気を起こしている大腸は想像以上に腫れていたり、病気により腎臓が左右で大きさがかなり違っていたりと目で見て学ぶものは大きいです。実際の人体を確認しながら学ぶことができることは本当に貴重な機会です。

先月曾祖母が亡くなり、通夜、葬儀が行われ、曾祖母は、親戚、近所の人達、生前交流があった人達に見送られて、亡くなってから二日後に旅立っていきました。ご献体を志した方たちのお骨が遺族に引き渡されるのは、ほとんどが死後二年たった解剖慰霊祭の時だそうです。体を使われ、二年間も葬儀が行われるのを待っていると思うと本当になかなか決断できるものではなく感謝の気持ちでいっぱいになります。ご献体をして下さる人達の気持ちに応えられるようにしっかり学んでいきたいと思います。